

# 『自叙伝』の改稿

— 森田草平研究(一) —

石 崎 等

- 一、はじめに
- 二、『自叙伝』のテキストならびに改稿の概観(以上、前集)
- 三、改稿の問題点(本集)

## 三、改稿の問題点(その一)

### A 削除をめぐって

『自叙伝』が『煤煙』ほどではないにしても、新聞初出(a)は、かなり無理な状態での執筆だったため、単行本(c)として上梓する際に全面的な改稿がなされている(a)ことについてはすでに概観しておいたが、本稿は、表現の細部にわたる改稿の対校表を作成する目的ではないので、いくつかの問題点を取り挙げ、それを中心に草平の創作意識の核心に迫ってゆく、という方法を採用ことにしたい。まず a → c の間の改稿の最も明瞭な指標である削除について考えてみよう。比較的まとまった削除部分としては次の六箇所がある。括弧内の数字は、初出の章・回数を示す。

- (1) 『煤煙』の感想(二の一)
  - (2) 「高名な女詩人」が書いた『第三者』という作品の梗概とその感想(三の二)
  - (3) 女の書簡一通とその感想(六の一)
  - (4) 『煤煙』執筆についての感想(七の四)
  - (5) 執筆中の楽屋話めいた感想、ならびに女の告白が雑誌に発表されるという噂を聞いたときの感想(八の一)
  - (6) 女が雑誌に発表した『小説に描かれたるモデルの感想』及びその感想(九の九、九の十二)
- このうち、(6)は『未練』との接続箇所でもあり、削除としては最も長い。新聞小説としての結末を急いだために、『未練』という独立性の強い作品との接続・照応の関係上、大幅な削除を余儀なくさせられた箇所である。(1)~(5)は短いのでそのまま抜き出してみる。
- (1) 序ながら云ふ。『煤煙』を読んで、其主人公たる要吉から神経質らしい顔附をした瘡形やまがたの男を想像するのは無理もない。併し其

作者迄が左様だと思つたら——まづ間違ひである。成程身長は高い。が、其外に似寄つた所はなからう——勿論あの中に一言も主人公の風采について筆をつけてはないけれど——血色の好い、健全な、と云つて鍛へ上げたのではないから筋肉の締らぬ、飯へば五つ六つの子供が其儘大きく成つたやうな、斯んな風采を具へた主人公が有るだらうか。あらゆる稗史小説をたづねて、唯一人イブセンの筆にかゝつた『ペール、ギント』位なものであらう。あれだけは何うもそんな奴の様な気がする。

こんな事を云つても、一人位は笑はないで読んで呉れる人もあらうかと、思ひ切つて書いて見た。(原総ルビ、以下略)

(2) 其間、ある高名な女詩人が今度の事から暗示を得たやうな物を書いたと云ふ噂が伝はつた。其人は主人とも二人ながら私の長い知人であつたが、如何云ふものか、それが雑誌に出ても、私は見たいと思はなかつた。見ずに済むものなら済ましたいとも思つた。

併し或人が来て其雑誌を置いて行かれた後では、直に手に取て見ずに居られなかつた。表題は『第三者』とあつた。概略の筋を云へば、或文学博士の許に若い華美好きの奥さんがあつた。其家へ出入する学生で、自分よりも年下の男を翻弄するやうな、又心底可愛がるやうな調子で待遇つて居たが、とう／＼男の方から一生懸命に成つて来たので、如何した機会か一緒に毒を仰いだ。毒を仰いでから、急にわれに帰つて、主人の膝に縋り着いたまゝ息

を引くといふ、一寸メロドラマ式のものであつた。

これを読んだ時の私の心持は何時でも再現するが出来る。併し如何しても言葉では言ひ表はすことが出来ない。

(3) ……とあつて、「貴方は何んな事が有つても亜米利加へは行かぬ、私も呼び寄せる様なことはない。それでも心配なら、私が独立する迄、一切書信の往復もしないと、斯う云つて置く外はない。左様いたさねば、私は手足さへ動かす自由もない。目下、私の境遇の窮屈さ加減は、とてもとても貴方が想像して下さる様なものぢやない。」

それから先日一寸申上げハッセル夫人の家庭につきての報告を得たが、何日にも来て宜しきとのこと、又非常に優待される様なれど、少し気懸りなのは、何さまミセス、ハッセルとは道友の関係もあり、有名な日本最良の禅氣違ひなれば、何の道坐禅の方のお相手役と、経典を調べるお手伝ひや、日本語を教へることなどなれば、私として容易にて、且報酬も過分なれど余程新しき個人的関係を作らねば成らぬことなるべく、義理に絡まれて、他日身を引き難く成りはせぬかと、それが心配なれば、いつも全く知らざる人の家庭に入る方将来の為よろしからむかとも考へ居た。ともかくも一先づ黙想教会の方へ行き、其処に少し身体の方の静養をなし、其間に適当な道を求むるつもりにて。

此処迄読んで、私は如何いふものか「何さま」と云ふ文字が気

に成つた。ラッセル夫人とは何んな女か知らぬ。併し米国辺りの所謂日本最良といふもの位趣味の下劣なものはないと聞く。兎に角、私はあの女の運命を外にして、あの女の執る手段にはどうも同情が出来ない。

(4) 最初は七八十回でをはる予定なのが、百回を超へても未だ終らぬ。目の前に終局が見えて居るやうで、仲々其処迄到らぬ。私にそれが又苦勞に成つた。今日は明日はと思ひながら、百二十七回に成つた。到頭をはりの日が来た。

(5) 一方では又糊口の代にも困つた。私の書いたものが世俗の好奇心に投じたためでもあらう、二三の雑誌社から何か書いて呉れと頼まれたが、それ所ではないと思ひながら無下に斥けることも出来ぬ境遇にあつた。まゝよ、あの女の生きて居る間は、私も生きて居る必要があるのだと一々それを請合つた。さて請合ひはしたものの、何も書くことがない。私はあの女の事より外に書くことはなかつた。それでも馬車馬の様な心持で、苛々しながら筆を握つた。(a)

今度は最うあの女がそんな物でも書く女だと云ふことは疑はなかつた。私は又あの女の音信を雑誌から聞く様に成つた——恰度山から戻つた当座、あの女の音信を新聞から聞いたやうに。

それにしても、あの女は其後長い手紙の中に、新聞に向つて饒つたとは皆貴方を相手取つて云つたのだ、貴方と眼と眼を見合ながら饒舌つたのだ、世間を相手にして、世間の前に弁解したもの

とはやうもく思つて呉れたとあつた今度は何方を相手にして饒舌つたのだらう——丸で世間を出離したものゝ様にあの女を思つて居たのは、私の間違ひだつたのか。(b)

『自叙伝』は、題名の通り、「私」という主人公の自伝的一人称小説である。『煤煙』の場合は、一応客観小説の形式で書かれているが「小島要吉」「真鍋朋子」となっていた。事件的に『自叙伝』は『煤煙』に接続しているから、類推して名前を「要吉」「朋子」と呼称したほうが論述しやすいのだが、二つの小説の表現形態は明らかに違ふし、『自叙伝』という作品の性格を考慮すると、一貫して用いられている「私」「あの女」(あるいは「女」としたほうが作品の雰囲気や伝えやすいと思われる。したがってやや煩瑣だが「朋子」は「あの女」あるいは「女」で通すこととする。

(1)は、王子駅で「あの女」と別れ(そのとき「私」が言った「では最う其日(註・再会したとき即ち再び死を選ぶ日)迄逢はない」「勿論手紙なども遣取りしないから、其つもりで。」という言葉を、「あの女」は冷酷なものとしてのちのちまで拘泥することになるのだが)、「神戸」(モデルは「煤煙」事件の際、奔走し尽力した生田長江)に同道され、雨の降る東京に帰ってきて一夜を過ごしたその翌朝、はっと目覚め「如何にも自分と云ふものゝブルータル、サイド(獣に似た側)が遺憾なく現はれた様な気がして」、つい『煤煙』に描いた要吉の容貌や風采に触れてしまった箇所である。不用意に筆がすべったというべきであろう。『自叙伝』は、主人公である「私」が『煤煙』の執筆に

書き込みながら、完成させるまでのプロセスを描こうとしている小説だから、ここに完成した『煤煙』のことが登場すること自体、明らかな叙述の混乱である。とくに最後のパラグラフは小説のぶち壊しであり不要の文脈であろう。削除は妥当であった。

それに対して、(2)は別種の意味での削除の例である。

「ある高名な女詩人」とは与謝野晶子のことであり、戯曲『第三者』は、「煤煙」事件に触発されて書かれたものといわれている。神崎清は『名作とそのモデル』の「煤煙・森田草平」の項で石川啄木の日記を引き、「芝居のモデルにすぎないにもせよ、人妻の晶子が、心中の相手になぜ草平をえらんだのであろう。新聞沙汰になつた草平をからかつたのかも知れない」と述べている。啄木の日記とは、「明治四十一年日記」の五月二日の条にある次のような記述である。啄木はその冒頭に「与謝野氏は外出した。」と書きしるしているところから、ここでは晶子と啄木二人だけの間に交わされた会話であるらしい。

それから又、此頃脱稿したといふ一幕物の戯曲「第三者」の話をした。女主人公（博士夫人）は女史自身で、一緒に自殺する男は森田白楊君、そこへ出て来て女主人公に忠告する大学生は茅野君（註・蕭々）を書いたのださうな。それから、モ一つ、去年の夏から起稿して半分書いた、万朝報へ約束の、題未定の小説も亦、森田君を書いたのだと話した。

神崎清は啄木の日記だけを根拠にしているらしく、『第三者』の実

物や『自叙伝』におけるこの部分を直接には見ていないと思われる。

実のところ、わたくしも「新声」に発表されたといわれている『第三者』を確認していない。今後の調査に俟ちたいが、それにしても、晶子がなぜ夫婦の危機を暗示するような戯曲を書いたのであろうか。啄木が日記に書いている『不覚』（明42・8・10—9・19「万朝報」）も草平をモデルにしたものだということが、晶子にとって草平という青年文学者は一体何だったのか。また逆に草平にとって晶子はどういう存在だったのか。一般的にいえば、当時の文学青年にとって晶子は、かつて奔放かつ大胆に官能の解放と肯定とをうたつた「明星」の女帝であり、渴仰すべき歌人として見られていたことは否定できない。その意味では禅に拘執していた平塚らいてうとはまったく違った女性であった。こころみにらいてう二十二歳のときの歌「幽愁」三十八首（明41・11・5「明星」終刊第百号）の中からいくつかを引いてみよう。

消えまどう手燭をなか持むらん君と涅槃の空に照らばや  
わが恋は真夏の昼の日のもとの深き甘寝の静けさにして

新たに燃えて狂へる焰なり焼かむ焼かれむあひあひし胸

君は朽ち我は枯るとも口づけし魂のゆらぎは永久ならぬかは  
みづからを憎む心に咎めけり心あまりに人を愛でずや

恋ふる身の恐怖え堪へぬ弱ごころ恋ふるが故に死をこそ願へ

ともすれば思ひまどひぬ『美しくしき死』に生きなむは『美しき世』と

草平との恋愛体験とその余燼を冷静にみつめながら詠んだものと推

測できるが、「明星」的な歌風でありながら、そこにはいかにもらしいてうらしい観念的・思索的な傾向が顕著にうかがえるのは否めない。矛盾しあう心情の混在も草平が『自叙伝』で形象化した「あの女」の面貌を彷彿させる。

それにしても、草平が平塚らいてうの短篇『愛の末日』（『煤煙』の中では『末日』になつてゐる）に興味をいだき、その批評を手紙に書き送ってから急速に親密の度を深めていったのは、明治四十一年一月頃であるから、啄木日記の「去年の夏から起稿して半分書いた」という記述を信ずると、「煤煙」事件発生以前の草平をモデルとして設定したことは、それだけ草平が奇妙な魅力をもつ人間として晶子に印象されたのであろうか。晶子研究の立場からもこの点は興味深いことである。

さて、草平は、引用した削除部分(2)の最後に、「これを読んだ時の私の心持は何時でも再現するが出来る。併し如何しても言葉では言ひ表はすことが出来ない。」と曖昧な表現を用いて韜晦し、あからさまな感想を書きつけることはしなかった。しかしこの回避と『第三者』へのこだわりは、『自叙伝』完成後、自著を携えてしげしげと晶子の許を訪ねることをさせるのである。また、『自叙伝』の発表から二年後、草平と晶子との間に横たわっている隠微な心理の綾は、同じ「東京朝日新聞」に、中勘助の『銀の匙』（大2・4・8―6・4）のあとを受けて掲載された自伝小説『明るみへ』（大2・6・5―9・15）の登場人物吉村像として発展する。いってみれば、「煤煙」事件後の草平の

姿の一面がすっぱ抜かれたわけである。いま、朝日の初出を底本とした講談社版『定本与謝野晶子全集』第十一巻収録のものをテキストにしてその部分を引用してみる。作中の「京子」は晶子、「吉村」は森田草平である。

京子は吉村文学士から来た葉書を机の上に置いて、其前にもう一時間余りも頬杖を突いた儘で居るのである。

あなたもやつぱり××だ。

かう書いてあるのである。××と云ふのは名高い朋子と云ふ令嬢の別号なのである。

吉村は昨夕その女を女主人公にして書いた自作の小説を京子に持つて来てくれたのである。

自分が昨夜吉村に云つて居た言葉程しらしらしいものはないと思つて、京子は自分が意久地なしだと思はれてならないのである。吉村と云ふ人は何時も自分を女と云ふものゝ中から自身と語るべく、選ばれて出て来た女として見て居る人なのであるから、臆病な自分はどうしてもあつた傾向の話をするやうになるのは已むを得ないとしても、真実らしく何も嘘までも云はないでもよかつたではないか、吉村は自分に最初かう云つたのである。

「僕は此頃一人の叔母さんが欲しいのです。親でもなければ姉でもない、妹でもない、恋人でもない叔母さんです。どんな事でも打明ける叔母さんが一人欲しくてならないのです。何んでも其人に打明けるのですよ。あらゆる事を云つていゝ叔母さんなんです。性欲

の事なんかまでも話の出来る叔母さんなんです。」

自分は其言葉の初めから、叔母さんと云ふものに自分を擬して居るのではないかと妙な気がしたのであつた。

「さうですかねえ。」

無意味に幾つも点頭うなづいて見せたりした。それだけでは済まない筈である、と云ふやうに吉村は自分の顔をじつと眺め入つて居た。

「私にそんなことを頼む人があつたら私は。」

とだけよりよう云はずに空虚な笑ひやうを自分にして居た。

「叔母さんを是非拵こしらへなければならぬ気がするんです。」

「私なら人からそんなことを云はれたら困りますわ。」

「厭だと云つていらつしやる方に無理に頼むことは出来ませんが、なつたつていいぢやありませんか。」

「でもね、私には無理なんですよ。」(九十六、傍点引用者)

このあと会話はさらに続き、「吉村」が自分にはもう「性欲」もなく「恋人」を作つたりする気が少しもないと言つと、「京子」が「私もないわ。」と口から出まかせを吐いてしまう。「真実らしく何も嘘までも云はないでもよかつた」という反省はこの一言にかかつていた。

「吉村」の婉曲に迫るくどきもなかなかだが、その言葉が真実でないことを見抜けない「京子」ではないし、またその逆に「吉村」の言葉についても同断といえるだろう。隠微な心理をかかえこんでしまった二人は、かろうじて危険な橋を渡り終えお互いの胸の中に収まったかに見えた。しかし翌日「吉村」は「あなたもやつぱり××だ」という

葉書を書き送ってくる。××とは『自叙伝』における朋子の法号「惠薫」だったのであろうか。「京子」は葉書の余白に「それ程縁もない方に、／ひよんな言葉を聞きながら、／咎めだてさへしよとせぬ、／良人の留守の気無精さ。」と書きつけて細かく引き裂いてしまう。

草平がいつ頃、晶子を訪ね、ここに展開されている話をしたのは確定できないが、二人の間で「青鞥」(明44・9創刊)と覚しき雑誌が話題となつており、「良人の留守」とあるところから、夫の寛が熱田丸でフランスに旅立つた明治四十四年十一月以降のことと考えられる。

とすると、「その女を女主人公にして書いた自作の小説」とは『煤煙』ではなく『煤煙』だと、第一巻が明治四十三年二月、第二巻が同年八月、第三巻が大正二年八月、第四巻が同年十一月にそれぞれ刊行されている)、明治四十四年十二月二十日に出版された『自叙伝』と考えるのが妥当であり、そうなると草平は、明治四十四年暮か翌年一月頃、寛不在の晶子を訪ね「叔母さん」になつてほしいと婉曲に迫つていったわけである。平塚らいてうとの関係に疲れた草平が、物わかりの悪い理屈の人に厭き、人情の機微を知つた情感の人である「叔母さん」によつて精神の静謐と安定とを求めようとしたことはそれなりに理解できないわけではない。しかしそれはあくまでも草平個人の甘えにすぎない。

このとき晶子は、情熱的な生涯のピークは越えたとはいえまだ三十歳の若さであり、草平のほうは三歳年下の三十歳であつた。

草平がいつも晶子を「女と云ふもの」の中から自身と語るべく選ばれ

出て来た女として見て居る」と書いている晶子の観察は信じてよいであろう。そういう真摯な接し方をする男性に女性として不快感をもよおすことはなかったにちがいない。しかし、もしかりに晶子が好感をいだいていたとしても、「煤煙」事件の当事者の「叔母さん」になつて、あらゆることの相談相手になるなどは、まさに「へ気無精」極まりないことであつた。新詩社に出入りした多くの男性に接してきた晶子にしてみれば、来訪の裏にひそむ草平の欲望などいとも簡単に見抜けることができたはずである。しかしその洞察力をもちながら、草平の野暮つたさのなかにある真剣な態度をもてあましたのか、それとも草平をモデルにして創作したことの弱味があつたからか、嘘までついてもはや現役の女ではないことを肯定し、しかも男の甘えを強引にはねつけることができなかった。ここには、言葉と心理の背反にいら立ち自己嫌悪にかられている晶子の姿が象徴的に描かれている。

こうして、らいてうと違う女性であるという晶子への甘えの迷惑はみごとにはずれてしまうことになる。こういう誤差はどうして生じてしまうのか。実は、草平とは、現実生活において、正確な測定をしたつもりでも、たえずそういう誤差を体験してしまふような種類の人間のひとりであつたのではないだろうか。そこに草平文学の長所も短所もたたみこまれているのではなからうか。削除(2)の「へ心持」と「言葉」との乖離を放置したまま、その間にひろがる溝をたんねんに埋めようとしなからひとの誤解を生む。また相手の心理を読むことな

な一方的かつ独善的な解釈や態度が、ひととひととの間に壁を作つてしまふ。『自叙伝』における「私」と「あの女」の関係もこういう箇所

所に本質的な問題として露呈しているのである。ところで、削除してしまつた箇所についてあれこれ考察することは無意味だろうか。そうは思わない。削除部分によつては、細部の改稿など以上に作品の秘密を垣間見させる場合もある。

『自叙伝』という作品は、「あの女」からの書簡なしにはプロットが充分うまく展開しないようになってゐる。いってみれば、書簡の引用で成り立っている小説である。なかには「あの女の手紙も最早残り少へな」に成つた。此処に日附の分らぬものが一通ある。(其前に松本から東筑摩郡とやらへ移つた知らせが来た筈だが、それが今見当らぬ。)(六の四)などという見苦しい語るに落ちたところもあり、いかに作者が書簡という資料の操作に頼つていたかが判る。その点では、『煤煙』『自叙伝』の執筆に際し強い影響を受けたダモンツィオの『死の勝利』の場合のスマートさにははるかに及ばない。『死の勝利』では主人公ジョルジョが過去二年間にわたつて書いた二百九十四通のおそるべき量の手紙が、愛人のイッポリタの手によりきれいに分類整理されて束ねられており、それを繙きながら二人して過去の激情にみちた愛の航跡を回想するプロットが仕込まれている。それに対して『自叙伝』は、実在の人物から届いたなまの書簡を引用することによつて「あの女」の実体に少しでも迫り、自己の再現と女の「幻影」を反芻しつつその永遠化につとめる手段として用いられているのである。

しかし作者は不都合と思われた書簡についてかならずしも固執はしなかった。削除(3)はその唯一といつてよい例である。

『自叙伝』の掲載が朝日新聞社内から不興を買い、早期に掲載の終了を迫られたことは前述したが、その要因として、素材自体がはらむ問題性もさることながら、『自叙伝』には引用があまりにも多くありすぎるといふことが考えられる。おもに書簡だが、それに新聞記事となつた談話、遺書、雑誌発表の文章などを加えると全部で長短二十八箇所に及ぶ。その最長のものは、明治四十一年六月十日付の「あの女の手紙」であり、四の五(第二十九回)に始まり四の十三(第三十七回)の大半を占めている。原稿用紙にして約三十枚にわたる長文の書簡である。こういう引用にまで原稿料を支払わねばならないことになると、小説の創作とは一体何なのだ、という社内からの疑問にみちた言葉が聞こえてくるようである。しかしこの長文書簡なくしては『自叙伝』の文学的・思想的な価値は半減するし、また語ることができないのである。その重要な意義については後述に俟つことにして、(3)の考察に入る前に、まず引用群の全貌を把握しておくことにしたい。

二	章	
	分類記号	内容
(イ)	引用及びその種別	禅学令嬢の告白(*新聞記事)
(ロ)		あの女の遺書(〃)
(ハ)		あの女の遺書(木下時子宛)(〃)
(ニ)		木下時子の談話(〃)
(ホ)		〃(〃)
	初出の章と回数	日付
	二の四	明41・3・21
	〃	3・21
	〃	〃
	二の五	21

九	八	七	六	五	四	三
(ク)	(ホ)	(イ)	(ロ)	(ハ)	(ニ)	(ホ)
あの女の『小説に描かれたるモデルの感想』(〃)	あの女の告白『逸題』(雑誌発表)	あの女の書いた戯曲『退京』(雑誌発表)	あの女の私宛書簡(*消印信州松本)	あの女の私宛書簡	あの女の私宛書簡	あの女の神戸先生宛書簡
九の九	八の二〇五	七の四	六の二	五の五	四の三	三の四
秋	初夏	明42・5・9	明42・3・12	明42・5・6	明42・5・10	明42・5・30

のちにこの引用一覧表を活用して『自叙伝』論を展開してみたいが、とりあえずは本章の目的である削除の問題に戻る。この中で、全



面削除された引用部分は、表の最後、分類記号(ウ)の『小説に描かれたモデルの感想』(本章の冒頭に列挙した(6)に該当)であり、これから考察する削除の例(3)は、表の(レ)に相当する。

書簡の改作は「自叙伝」というジャンルの性格上許されることではないと思われるが、多くの資料と同様、その取捨選択、配列の自由、あるいは不都合に思われる部分的削除などはとうぜん作者にその権利として委ねられている。ただ、「あの女」の「私」宛の書簡については、取捨選択がほとんどなかったのではないかと推定される。「私」の書簡が少ないのは下書きや写しを残しておかなかった結果とみることができる。作者はどのようにして単行本の上梓に際し、異例ともいえる(3)の削除を敢行したのであろうか。あの引用では接続部分が不明瞭なので、「……とあつて」の前を引用してみる。

七月八日附の手紙には、

「あの日以来、母親は仲々安心どころか、思ひも寄らぬ臆惻をめぐらして、あの儘にては逆も始末に成らず、私渡米の儀につきても非常に危険があり、一方ならぬ心配をしなければ、何んな事に成るやもして父などに我々の意中を明かしなどすれば、何んな事に成るやも知れず、益<sup>ますく</sup>実行の上の困難を来すことゝ存外「候」へ云々。」

ここでいわれている「我々の意中」にひそむ「実行」とは、「私」が『煤煙』を完成した既に再び会ってしそこなつた心中を成し遂げるということである。この約束が「あの女」によって一方的に破棄されてしまうのが、表(ウ)の書簡(明41・12・9付)においてであるが、まだ

ここではそれが生きていた。擬装的な謹慎によってお互いに機会を覗っていたわけだ。しかし「あの女」にとって最大の悩みは、母親の監視のもとに生きていくことであつた。「私は手足さへ動かす自由もない」という拘束された生活であつた。したがって渡米計画はそういう「家」や「親」から脱出するひとつのステップであつたにちがいないのだ。「あの女」は「私」の自由さと較べれば、はるかにきびしい条件を背負っていた。死を選ぶにさえ「家」からの「独立」を考え、「親」と戦わねばならなかつたのだから。しかし「私」はそれを正しく認識し同情する眼をもつてはいない。削除した文末には「兎に角、私はあの女の運命を外にして、あの女の執る手段にはどうも同情が来ない」とある。「私」の関心は、あくまでも「あの女の運命」つまり「裏面の消息」であり「特殊な悩み」であり「暗い影」を解明すること、すなわちそれが『煤煙』という小説を不朽の名作にすることであつたからである。

いずれにしても、六の一(第五十五回)は、半分以上にわたつて大幅な改稿と削除が行われており、作者が最も書き悩んだ章のひとつといえそうである。読者は、五章までに「あの女」との書簡交換を通して関係の復活がなされていることを知っているし、また女宅への訪問、茅ヶ崎に転地静養している「あの女」と母親を訪ねるといふ「私」の機会があればすぐに動くという行動を知っている。しかしいま、この削除前後のストーリーにとっての緊急の問題は、「あの女」が目論みかなり具体化しているアメリカ行きをどうするかということだ。こ

の計画が小説に登場するのは、(イ)の書簡の中である。ただ「遅くも秋までには漫遊の途に着く」とあってそれが渡米か否かははっきりしていない。季節は初夏。文面には、海外漫遊以前に、「師友や、真面目な質問をして呉れた未見の知己」に今回の事件についての自分の態度を表明したいから、『煤煙』の出版時日を知らせてくれとあった。実際に「あの女」の希望が実現するのは(ウ)の告白や感想によってであるが、それ以前に「あの女」は(イ)の書簡で漫遊云々と書いたのは「私」に接近するための手段であったとあやまっている(四の七)。それだけ二人にとってそれぞれの思惑において『煤煙』の完成は意味あることであった。

話を元に戻すと、具体化しつつあった「あの女」の渡米は、三者三様に微妙な心理の攪拌をストーリーに強いた。「女」にとっては、母親から監視されがらめになっている不自由な状態を打ち破るためのものである。そうして得た「自由」と「独立」とによってのみ、はじめて死は「私」と対等のものになり、また思いのままとなるであろう。母親は娘のアメリカ行きを断念させるかわりに、信州松本にある娘の友人の実家の許に行くことで妥協し、一時の「自由」を味わわせる自己満足と安心を得るであろう。一方「私」はどうか。金銭上の煩いに追われつつ歩らない小説をかかえて焦慮と呻吟の生活を続けている。『煤煙』を完成することによって「あの女の運命」を徹底的に解明するしか道がない。気が弱くなってきた「女」ハイブセンの『ヘツダ、ガブラア』を送ってみたりする。『煤煙』に描かれるであろう

ダナンツィオの『死の勝利』から『ヘツダガブラア』への推移——ここに「煤煙」事件の頹廢と風化を読み取ることはたやすい。しかし事實は、『煤煙』の朝日発表を見ることなく、「女」は「人と関係ある位置に身を置くことは私には最う堪へられない」(書簡ウ)といとも簡単な理由によって死を選択するという意思の変更を表明し「私」から突然去ってゆく。加筆訂正するとき、作者は容赦なく「あの女」が語った渡米の具体的プランを抹消し、それを不明瞭化することによって、より「あの女」の人間的な曖昧さ・矛盾だらけの不可解な性格を強調しようとしたのであろう。それが書簡の一部削除という異例の形となつてあらわれたのである。

削除(4)は格別問題がないであろう。(5)については若干の説明を要す。

(4)に引き続き、七の五章で「五月のある日、私は社の楼上でやつとをはりの一回を書上げ」てようやく『煤煙』を脱稿する。その報告がてら世話になった「或家」(漱石宅)を訪ねたあと、築土の寺の下宿に帰ってきて一週間前に届いたまま封を切らないでいた母の手紙(ウ)を読む。そこには、「あの女」と関係し「私」の「遣つて見ずく」の情熱の犠牲になつて離縁させられ、この春郷里で再縁した(初出の「二月十九日」という日付はのち削除)隅江のことが書いてあった。その夜、隅江の夢を見、従順な妻であったその女のことをしばし回想し、「取返しのかぬ境遇」に追い込んでしまったことを反省し同情してみる(七の五(八))。

とうぜん新聞を読んでいるはずなのに、『煤煙』の連載が終了しても「あの女」からは何の音信もない。〈未練〉を断ち切れない「私は毎日洞穴に面して呼吸をして居る様な心持で日を送つ」ていた。『煤煙』の出版は当局の取締が厳しいという理由で本屋が二の足を踏み進行する見込みがない。(5)―(a)はその後に展開している箇所である。これと(5)―(b)の間には次のような叙述がはさまっている。

彼是する「其」間に、月もかはつた。何処からともなく、あの女が又(或女の雑誌に何か)告白めいたものを書いたと云ふ噂が伝はつた。〈到頭あの女から音便があつた。一年半かゝつて、『煤煙』を書いた報酬は与へられた。最う可い、何んな事でも書くが可い。〉へゝの加筆が(b)の削除に取って代えられたとみてよい。改稿の段階で作者は、公的な場所に書かれたものを「あの女」から来た最初の正式な〈音便〉と認識し直し、興奮と好奇心に駆られて、初夏の太陽がふりそそぐ日中、「女」の告白が掲載された雑誌をあたふたと買い求めに出掛けてゆく「私」の姿を描き、臨場感をもたせた表現に引き締めている。(4)の告白『逸題』(のち『偽はらざる告白』と改稿)がそれに続くのはとうぜんである。

ところで、小説を脱稿した「私」は、「あの女」への〈未練〉にとらえられていて、小説家としての成功に無頓着だったのだろうか。そうではないだろう。作者草平に目を転ずれば、『病葉』『死児』『白日夢』『犬吼呻』『地震』『遺骨』『仮寝姿』など、どちらかといえは美文調の初期短篇小説群――それらは、川下江村・生田長江との共著『草

雲雀』(明40・11 服部書店)に収録されている――と『煤煙』を比較したとき、わずか数年の時間的なへだたりしかないのに、作家としての飛躍的な成熟は目を瞠らせるものがある。それが「あの女」―平塚らいてうの存在なしにはありえなかったとしたら、「私」―草平の女をめぐる苦悩にみちた精神的彷徨も決して無駄な投資ではなかったといえるだろう。「二三の雑誌社から何か書いて呉れ」と言ってきたのは、単に「世俗の好奇心」をくすぐったからではあるまい。そこには『煤煙』の文学的な勝利があつたからだ。近松秋江は「草平氏は風葉氏などが十四五年かゝつて得た文壇上の位置を煤煙一篇によりてえた」と語つた。まさに『煤煙』は草平の不退転の力業であつた。その後の事件の経過を追いつつ創作上の秘密を明かしたものが『自叙伝』ということになる。なお、(6)の雑誌に発表された『小説に描かれたるモデルの感想』とその感想の削除については、長文なこともあり次章の「構成をめぐる」で検討を加えることにしたい。(未完)

――一九八二・一・一〇――

\* 本稿は、跡見学園特別研究費の助成にもとづくものである。